

満州人学者の従祀問題

On the Issue of Manchu Scholars' Participating in Sacrifices in the
Confucian Temple

滝野 邦雄
Takino, Kunio

ABSTRACT

This article discusses the issue of the refusal by all Han officials to participate in the sacrifices in the Confucian Temple when the Kangxi emperor requested Manchu scholars to participate in these sacrifices. Kangxi's request was not made solely on the basis of political considerations: he also sought to deliberately influence the spiritual culture of the Han ethnic group. However, Han officials strenuously resisted this request. As a result, there was nothing that Kangxi could do to force them. Kangxi took advantage of this opportunity to direct his efforts at political control rather than further planning to use spiritual culture to control the Han ethnic group. It is the author's opinion that the Han scholars' opposition to the Manchu scholars' participation in the sacrifices was a defining event leading to Kangxi's intention to stop using rule by the kingly way to adopting rule by the way of a hegemon.

はじめに

康熙二十三年（一六八四）は、甲子の歳になる。康熙二年に黄宗羲（明・萬曆三十七年〔一六一〇〕～清・康熙三十四年〔一六九五〕）は、この甲子の歳のことを次のように述べる。

乃ち胡翰の所謂ゆる十二運なる者を觀るに、周の敬王の甲子（紀元前四十七年）に起こり以て今に至るまで、皆な一亂（『孟子』滕文公下）の運に在

り。向後二十年〔の康熙二十三年〕にして「大莊」（『易』）に交入し、始めて一治（『孟子』滕文公下）を得、則ち三代の盛 猶お未だ望みを絶たざるなり（『明夷待訪録』康熙二年題辭）。

『孟子』滕文公下に「天下の生は久し。一治一亂す」とあることや、『易』大莊卦などを踏まえて、康熙二十三年から後は、世の中が治まるとする。康熙二十三年甲子歳を時代の変換点として意識されていたようである。

また、華亭の董含（明・天啓四年〔一六二四〕～清・康熙三十六年〔一六九七〕）の『三岡識略』には次のようにある。

甲子元旦丁卯（康熙二十三年正月一日）、歳一百八十を逆計するに、三元（上元・中・下元）^{めぐ} 周りて復た始まり、上元の甲子と爲す。上書する者有りて、以爲らく上元を重起するは、累朝 ^あ 違ひ難し、請う古の帝王の改元・封禪・巡狩の諸々の大典に循いて、以て天庥（天の加護）に答えよ、と（『三岡識略』巻九・「上元甲子」条）。

康熙二十三年は、時代の変換点であるので、古の帝王が行なった「改元・封禪・巡狩」を行なうべきであると提案したものがでたというのである。

実際には康熙帝は「改元・封禪・巡狩」の提案には従わなかった。しかし、この時、康熙帝は曲阜に行き、孔子を祭り、漢民族の文化・伝統の理解者であることを示す。そうしておいて、ある提案をさせている。それが満州人学者の孔子廟への従祀である。ただし、この提案は、漢人官僚の反対で、あっけなく否定されてしまう。また、康熙帝も無理強いはしなかった。拙稿では、この提議がなされた経緯を見て、康熙帝が何故このようなことを行なおうとしたのかを検討してみたい。

(1)

康熙三年（一六六四）甲辰科の三甲八十五名の進士で、康熙十八年（一六七九）己未科博學鴻儒第二等二十五名の曹禾は、封禪を行なうべきであると提案する。その理由として、康熙二十三年が上元甲子にあたっているからだという。

翰林院編修の曹禾 題もて「恭しく皇上（康熙帝）の岱宗（泰山）に登りて以て功を成すを告げ以て盛徳を昭らかにするを請う」の事の爲にす……古帝の功德有る者は、黄帝に過ぎるは莫し。黄帝は上元甲子の貞元の運會星曆を考定し、天地の神祇（神々）・物類（万物）の官を建て、度数を制作し、造化に合符さす。是に由りて封禪（封禪の喩え）勒成し、遂に宇宙文明の象を開く。漢の武帝 其の時を得ず、則ち十一月甲子朔冬至を以て之に應ぶ①。[しかし] 數千年の景運 適たま今日に協う、功 成り治定まるの後、則ち天の紀を統べ、地の時に應じ、而して人の極を立てるは、^{まさ}端に今日に在り……（『幸魯盛典』卷二所引）。

- ①『史記』封禪書に「其の後二歳（太初元年〔B.C.104〕）、十一月甲子は朔旦冬至なり。[それは] 曆を推す者 本統（太初曆）を以てすればなり。天子（漢・武帝）^{みず}親から泰山に至り、十一月甲子朔旦冬至の日を以て上帝を明堂に祠る」。

また、吏部掌印給事中の王承祖は、巡狩を行なうように提案する。

……臣（王承祖）「舜典」の載せる所を讀むに「歳の二月、東に巡守し、^{ママ}岱宗に至りて柴し、山川を望秩す。^{つい}肆に東后に^{まみ}覲ゆ」と……我が皇上（康熙帝）民の瘼（民衆の疾苦・『詩經』大雅・皇矣）を念切し、登（みのる）こと殷阜（富足）なるを求め、必ず農功を以て先と爲せば、虞帝の制に倣いて東方を巡幸し、閭閻（民間）の利病を察し、風俗の厚薄を問い、祭を方嶽に設け、以て年豐（みのりゆたか）を祈らんことを請う。又た……臣（王承祖）史冊の載せる所を見るに、漢の高〔祖〕魯に至り太牢を以て孔子を祀り①、後世 其の一代の文治を開くを^ほ美む。倘し御輦の届る所 其の車服禮器を觀て、亦た古今 鉅（おおい）に觀て而して皇上（康熙帝）の文を右（とうと）ぶの至意もて之を史冊に載せれば、誠に千古不易の盛事なり……（『幸魯盛典』卷二所引）。

- ①『漢書』高帝紀下に「〔十二年〕十一月、行きて淮南より還る。魯を過りて、太牢を以て孔子を祠る」。

この曹禾の封禪と王承祖の巡狩との提案に対して、九卿などは、曹禾の泰山への封禪は取り上げられないが、王承祖の巡狩の提案は認めたいとする。しかし、康熙帝は、再議論を命じる。

又た九卿・詹事・科・道官員 會議し、翰林院編修の曹禾の「泰山に封禪するを請う」は、應に准行（とりあげる）せざるべし、科臣の王承祖の「巡狩①を行ない、泰山に燔柴②し、即ち孔林を過ぎりて禮器を觀るを③請う」は、應に准行すべし、と。上（康熙帝） 曰く「此の事は着して旨を候ちて行なわしむ。其れ合行に禮を典（つかさ）どり、察明にして具奏せしむべし。然れども事は重大に關すれば、此の〔題〕本は着して發回せしめ、爾ら滿・漢の大學士ら公同に詳議し擬票し具奏せよ」と（『康熙起居注』康熙二十三年二月二十九日乙丑条・一一四四頁）。

①『孟子』梁惠王下に「天子 諸侯に適くを巡狩と曰う。巡狩とは、守る所を巡るなり」。また、『書經』舜典に「歳の二月、東に巡守し岱宗に至りて柴し、山川を望秩す」。

②『儀禮』覲禮に「天を祭るに燔柴す」。『爾雅』釋天に「天を祭るを燔柴と曰う」。

③『史記』孔子世家に「太史公 曰く『……余 孔氏の書を讀み、其の人と爲りを想う。魯に適き、仲尼の廟堂・車服・禮器を觀て、〔また〕諸生 時を以て禮を其の家に習う〔も觀た〕……』と」。

なお、曹禾の封禪の提案について、出拠ははっきりしないが、『清史列傳』は次のように伝え、文名を売るためになされたものであるとしている。

曹禾、字は頌嘉、江蘇江陰の人。康熙三年の進士。……〔康熙〕十八年、博學鴻儒に召試され、翰林院編修を授けらる。……嘗て疏もて封禪を請い、給事中の王承祖の駁する所と爲る①。方象瑛と倪燦と其の文を讀みて謂えらく「鍾惺（一五七四年～一六二四年）司馬相如の「封禪頌」を評して『長卿（司馬相如） 豈に求むる所有りや。直ちに是れ胸中の好き文字なりて、肯て埋没さしめざるなり』②と言えり。〔曹〕禾 亦た想うに是れ此の意な

るか」と、しか云う……（『清史列傳』卷七十一・文苑傳二）。

①王承祖は「題爲請倣古帝之巡狩以勤民事以先聖治事」疏の中で、次のような理由から、曹禾の提案を批判する。

臣 『史記』封禪書を讀むに「上古の封禪する者 七十二君」(a)と。皆な荒唐無稽なるも、秦皇（始皇帝）・漢武（漢・武帝）倣いて之を行なうは、徳を耀かし功を張るに過ぎず。後世 ^{これ}焉を鄙しむ（『幸魯盛典』卷二所引）。

(a)『史記』封禪書には、「管仲 ^{いにしえ}曰く、古者 泰山に封じ梁父に禪する者、七十二家。而して夷吾の記す所の者は十有二なり……」とある。

②鍾惺・譚元春選定『古詩歸』（第三卷・漢一・司馬相如 封禪頌・十六葉）には、次のようになっている。

鍾[惺] 云えらく、[司馬]相如 亡（みまか）る。封禪[頌を遺言として伝えるの]は復た何の希む所なるや。[鍾惺が思うに]亦た只だ是れ胸中に此の一篇の好き文字有りて、自ら忍ぶ能わず、[また]肯て自ら没せざるのみ。文士の氣習、文を以て禍を取るも尚お辭せず。何ぞ寵を希むに及ぶを慮るに暇あらんや、と。

さて、この封禪・巡狩の提案に対して、工部給事中の任辰旦は「請停議封禪巡狩二事疏」を提出し両者ともにやめるように奏している。ただ、その否定案は封禪・巡狩ともに歴史的にみてもあやふやなものであり、こんなことはよく治まった、禹や舜に並ぶ康熙帝のいる現在では必要がないというものであった。

……竊かに以爲らく、封禪の説は惟れ秦の始皇・漢の武帝・宋の眞宗の諸々の君 之を行なうも、固より猥陋にして道^いうに足る無し。夫の巡狩の若きは、則ち「舜典」・「王制」の諸書に顯載するも、之を堯・湯・文・武に考ふるに及べば、其の事 未だ嘗て概見せず。亦た祇だ有虞 攝位を以て舉行すると夏后氏の塗山の會とのみ史冊に焉を紀す。……今、天下 一家にして、車書 一統し① [天下はうまく治まっている]。……況んや我が皇上

(康熙帝) 功德 巍煥 (盛大光明) にして、「聲教 四訖」②するをや。「普天率土 (ぜんこく)」③の人人 一の聖天子を奉じて以て治世と爲す。省方 (四方を巡視する) すれば固より神禹と齊蹤 (賢者と並ぶ) す。[しかし] 垂拱 (無為にしてうまく治まる) [という現状に] に即すれば、亦た大舜に仍りて並び美しく、揆は三 [皇] 五 [帝] に於いて合わざるはなし。[しかしながら、こうしたことは] 輒ち抑そも巡狩の行くと行かざるとに關する無きなり。且つ典禮 重大にして、久しく廢するの後なれば、實に創始するに同じ。簡畧なれば則ち觀瞻 (外見) に於いて難し。美を備うれば則ち費用に於いて煩なり。皆な熟籌して遠計せざる可からざるなり。竊かに我が皇上 (康熙帝) を見るに、至聖は天に配し、「允^{まこと}に公^{うやうや} (恭) しく克^よく讓」④り、即ち東に蕩し西に滌し、「大いに武の成るを告ぐ」(『書經』武成) れば、開闢以來、此の若く盛然と爲す。且つ尊號を受けず、謙にして益々光る⑤。諒に此の二事 自ずから宸斷有らん…… (『請停議封禪巡狩二事疏』『皇清奏議』卷二十一・三十九葉～四十一葉所収)。

①『中庸』第二十八章に「今、天下 車は軌を同じくし、書は文を同じくし、行ないは倫を同じくす」。

②『書經』禹貢に「東 海^{ひた}に漸り、西 流沙^{こうむ}に被り、朔南聲教に暨^{およ}び、四海^{いた}に訖^{いた}る」。

③『孟子』萬章上に「『詩』(『詩經』小雅・北山では「普天」を「溥天」にする) に云う、普天の下、王土に非ざるは莫く、率土の濱、王の臣に非ざるは莫し、と」。

④『書經』堯典に「允^{まこと}に恭^よしく克^よく讓る」。

⑤『易』謙卦に「象に曰く……謙は尊くして光る……」。

また、当時の禮部侍郎 (康熙二十二年十二月五日～康熙二十三年二月九日まで禮部右侍郎・同年二月九日～九月二日まで禮部左侍郎) であり後に文華殿大學士となる張玉書 (明・崇禎十五年 [一六四二] ～清・康熙五十年 [一七一]) も、両者とも認めないようと言う。しかし、曲阜へは巡幸するようにと提案す

る。

歴代の帝王 孔里に詣るは、[前] 漢の高帝（高祖）に始まり、後は則ち [後] 漢の明帝・章帝・安帝、北魏の孝文帝・唐の高宗・明皇（玄宗）・後周の太祖・宋の眞宗 皆な魯地を經過するを以て展祀するも、未だ専ら闕里に詣るの故事有らず。我が皇上（康熙帝） 經學に博綜にして宏く心傳を闡（あきら）かにし、道を重んじ文を崇とび、千古 並ぶ莫し。其れ東巡し、特に闕里を祀れ。應に睿裁を候たん（『張文貞集』 卷三・「停止封禪等議」）。

これをうけて、半年後に康熙帝は孔子廟などへの祭祀を執り行うために東巡を決定する。つまり、康熙帝の巡行は、もともと泰山や曲阜などで祭礼を行なうだけに限定されたものであった。

九卿 皇上（康熙帝）の東巡を會議するに、宜しく便（機会）に乗じて祭りを泰山の神及び闕里の孔廟に致すべし、と。上（康熙帝） 曰く「この議する所は行なう可きに似たり」と。明珠等 奏して曰く「誠に聖諭の如し。臣等 初めの時、竟に曉る能わず、今 天語を聆くに、方めて豁然たるを得」と。上（康熙帝） 之に頷く（『康熙起居注』 康熙二十三年九月十一日甲戌条・一二二六頁）。

ちなみに、『聖祖實録』ではこのことは十二日のこととされ、次のように記録されている。

禮部 旨に遵がい議覆するに、虞舜は東巡して岱宗に至り、燔柴し①祭りを致す、漢の高〔祖〕は魯を過ぎりて太牢を以て孔子を祀る②。俱に係れ巡歴の至る所、行きて祭禮を致す。今、皇上（康熙帝） 聖徳神功にして、符を堯・舜に同じくし、古の制に倣いて、爰に東巡を事とし、泰山・闕里を經過すれば、亦た應に祭を致すべし。泰山は五嶽を祀るの禮に照らして行ない、孔子は闕里の祀典に照らして行なえ、と。之に従う（『聖祖實録』 卷一百十六・康熙二十三年九月乙亥（十二日）条）。

①『書經』舜典に「歳の二月、東に巡守し岱宗に至りて柴し、山川を望秩す」。『儀禮』覲禮に「天を祭るに燔柴す」。『爾雅』釋天に「天を

祭るを燔柴と曰う」。

- ②『漢書』高帝紀下に「〔十二年〕十一月、……魯を過ぎりて、太牢を以て孔子を祠る」。

康熙帝は、出発に際して「聖駕 東巡するを以て詔を天下に頒す」として次のような詔を出している。

帝王の「誕に景命に膺り」①、萬邦を統御す。道は「民を觀る」②を重んじ、政は「莫（さだま）るを求む」③るを先にす。是を以て虞廷の肆覲④、肇めて「省方」⑤を挙げ、周室 懷柔し⑥、式つて歌い⑦時に邁く⑧。詩書 具に在れば、典制 丕きく昭らかにす。朕（康熙帝） 天庥（天命）を仰ぎ荷ない、祖烈を讃承し、茲に兆庶を撫す。「時れ雍ぎ」（『書經』堯典）、夙夜 孜孜として、懋めて治理を求め、「富を以てし教えを以てし」⑨、「敢えて怠違せず」（『詩經』商頌・殷武）を底すことを期す。猶お蔭屋（『易』豊卦）の艱難を慮るは、上達に由る罔し、故に直隸の郡縣に於いて、周覽巡行し、「勤めて施し」（『書經』洛誥）補助す。更に山左等の處の土宜（土地々々の好い）の俗尚を念うも、巡省を加えざれば、曷ぞ克く周知せんや。矧んや曆は甲子に逢い、世 昇平に際し、幸に泰運の恒新を圖り、芸生（普通の人々）を豫大⑩に措くに在り。時に乗じて駕に命じ、彼の民の依るを咨り、但だ樂利⑪は祇だ夫の一方を慰むるも、德澤 未だ九有に敷かれず、朕が心 焉を歎焉たり（謙しめり）。是を用って特に公を昭らかにし普くするに仁を弘めるを以てし、誠（やわらぐ）和の盛治を奏するを庶う。於戲、時に熙皞に臻り、彌いよ寬卹の恩を隆くし、戸ごとに樂しみ清寧にして、丕いに綿長の慶を篤くし、天下に布告し、咸な聞知せしめよ（『聖祖實錄』卷一百十六・康熙二十三年九月丁亥（二十二日）条）。

- ①『書經』武成に「誕に天命に膺り、以て方夏を撫す」。

- ②『易』觀卦に「先王 以て方を省、民を觀、教えを設く」。

- ③『詩經』大雅・皇矣に「皇なるかな上帝、下に臨みて赫たる有り、四方を監觀し、民の莫るを求む」。

- ④『書経』舜典に「歳の二月，東に巡守し岱宗に至りて柴し，山川を望
 秩す。肆に東后に覲^{ついで}ゆ^{まみ}」。
- ⑤ ②参照
- ⑥『詩経』周頌・時邁に「百神を懐柔し，河喬嶽に及ぶ」。
- ⑦『詩経』小雅・車輦に「徳^{なんじ}の女と與にする無しと雖も，式^もって歌い
 且つ舞わん」。
- ⑧『詩経』周頌・時邁に「時に其の邦に邁く」。
- ⑨『論語』子路に「子 衛に適く。冉有 僕たり。子 曰く『庶^{おほ}き哉』
 と。冉有 曰く『既に庶し，又た何をか加えん』と。曰く『之を富
 まさん』と。曰く『既に富めり。又た何をか加えん』と。曰く『之
 に教えん』と」。
- ⑩『易』豫卦に「豫の時義 大いなるかな」とあり，宋代あたりから
 「豊亨豫大」と熟して天下太平の意味に用いられる。
- ⑪『大學』傳第三章に「小人は其の楽しみを樂しみとし，其の利を利
 とす……」。

暦が甲子となり、「昇平」の世の中なので巡行して人々の暮らしぶりを視察して
 みたいという。ここには，中国を統治する皇帝として祭祀を行なうというこ
 にはふれられていない。

ただし，康熙帝は，このように詔したものの先ず江南に向かう。「南巡」を行
 なうのである。そして，南京に近づくと，明の太祖の陵の祭祀について上諭を発
 する。

明の太祖 一代の開創の令主にして，功德 並びに隆し。朕（康熙帝）
 方域を巡省し，將に江寧に及ばんとす。[江寧の] 鍾山の麓，[明の太祖の]
 陵寢^{すなわ} 斯ち在り。朕（康熙帝） 前代を優禮す。況んや其の君 實に賢な
 るに於いてをや。祀ること禮の如くせしむ可し（『聖祖實録』卷一百十七・
 康熙二十三年十月己未（二十七日）条＊『聖祖仁皇帝御製文集初集』卷十
 八では「二十五日」となっている）。

また、康熙帝は江寧（南京）に滞在中の十一月二日に百官を引き連れて明の太祖の陵の殿前で三跪九叩頭の礼を行なう（『康熙起居注』康熙二十三年十一月初二日癸亥条・一二四六頁）。その翌日には、太祖の陵墓の管理を命じて、「朕が古の帝王の陵寢を崇重するの至意に副^そえよ」（『聖祖實錄』卷一百十七・康熙二十三年十一月甲子（三日）条＊『聖祖仁皇帝御製文集初集』卷十四・「諭江南江西總督江蘇巡撫」も同じ）と述べる。

このようにして、康熙帝は前王朝への敬意を表わす。これは、清朝が前の明朝の祭祀を継承し、明の正統な後継者であることを江南の人々に宣言することであつたのであろうか。

(2)

康熙帝は、続いて、曲阜に赴く。いよいよ次は、孔子を祀るのである。

上（康熙帝） 大學士の王熙に命じて諭を衍聖公孔毓圻等に宣べしめて曰く「至聖の道は日月と並び行なわれ①、天地と運を同じくし、萬世の帝王咸な師法とする所にして、公卿士庶に逮びても率由せざる罔し。爾等 遠く聖澤を承け、世々家傳を守り、務めて「仁に^{のつと}型（刑）り^{ママ}義を講じ」②、中を履み和を蹈み、忠恕を存して以て心を立て、孝弟を敦くし以て修行するを期せよ。斯れ須く去らざるべくして、以て先訓を奉じ、以て朕の懷（おもい）を稱（かなえ）よ。爾等 其れ祇だ遵いて替えること母れ。特に諭す」と（『康熙起居注』康熙二十三年十一月十八日己卯条・一二五四頁）。

①『中庸』第三十章に「道 並び行なわれて相い悖らず」。『易』繫辭傳に「日月 運行す」。

②『禮記』禮運に「仁に刑（のつと）り讓を講じ、民に常有るを示す」。これまでのものに変更は加えるなという。そして、孔毓圻に「過闕里詩」一首を御製して与えている。それをうけて孔毓圻は言う。

前代の闕里に幸するの詩の、伝えらるる者は惟だ唐の明皇（玄宗）の一首のみ。今、聖製を仰ぎ誦すれば、實に遠く之に過ぎ、意義 正大にして、聲

調 喬皇なり。御墨の精工なるに至りては、其の妙を備え極む。臣（孔毓圻）之を得て永しえに傳家の世寶と爲さん。感激の至りに勝えず（『康熙起居注』康熙二十三年十一月十八日己卯条・一二五五頁）。

続けて、扈從する大臣たちが、このことを褒めたたえる。

大學士の明珠・王熙等 跪きて奏して曰く「先師孔子は道 大①にして徳隆なり、萬世の師と爲り、百王の法と爲る。然れども猶お其の徳有りて位無し。我が皇上（康熙帝） 徳・位 兼ね隆にして、心は聖學に契い、躬から至道を備え、「君と作り、師と作り」（『書經』泰誓上）、以て「人極を立つ」（『太極圖說』）。是を以て「師を尊ぶものは道を重んじ」②、典禮 隆備し、前古を度越す。歴代の帝王の闕里に幸する者、儀文の盛んなること未だ我が皇上（康熙帝）に如く者有らざるなり。臣等 聖明に遭逢し、備員扈從し、欣の至りに勝えず」と。學士の孫在豊・侍講學士の高士奇等 跪きて奏して曰く「至聖の道、萬世に昭垂し、文教を振興するは、實に一人に頼る。我が皇上（康熙帝） 躬から闕里に詣り、儀章を盛舉し、正に以て聖化を宣揚し、「羣生を蒸育す」③。凡そ「血氣有るもの」④、感發せざるはなし。誠に海内 向風の自るところ⑤、億載の「太平の基」（『漢書』楚元王傳）にして、獨り孔氏の子孫 皇恩に感沐せざるのみ」と（『康熙起居注』康熙二十三年十一月十八日己卯条・一二五五頁）。

①『史記』孔子世家に「夫子の道は至って大なり、故に天下能く夫子を容るるなし」。

②『禮記』學記の「師を尊ぶ所以なり」の鄭注に「師を尊ぶものは道を重んずるなり。臣位に處らしめざるなり」。また、『白虎通』王者不臣に「師を尊ぶものは道を重んず」。

③『漢書』宣帝紀に「詔して曰く『獄なる者は、萬民の命、暴を禁じ邪を止め、羣生を養育する所以なり』と」。また、司馬相如「封禪文」に「陛下 羣生を仁育す」。

④『禮記』三年間に「凡そ天地の間に生ずる者、血氣有るの類は、必ず

知有り」。

- ⑤『中庸』第三十三章に「遠きの近きを知り、風の自るを知り、微の顕なるを知れば、與に徳に入る可し」。

このようにして扈從した大学士たちから称賛を受けた康熙帝は、続いて周公を褒めたたえて、祭祀を行なうことを提議させる。

[康熙帝は] 又大學士の明珠に論して曰く「周公は古の大聖人にして、「禮を制し樂を作り」①、萬世に垂示す。今、[周公の] 廟は曲阜に在り、應に祭を致すを行なうべし。此れ係れ重大な典禮なれば、爾（明珠）が衙門禮部・翰林院を會同し詳議し來り奏せよ」と（『康熙起居注』康熙二十三年十一月十八日己卯条・一二五五頁）。

- ①『禮記』明堂位に「周公 天子の位を踐みて以て天下を治む。六年に諸公を明堂に朝せしめ、禮を制し樂を作り、度量を頒ちて、天下大いに服す」。

すぐに、次のような提案がなされる。

該衙門 議（提議）し得たり、道統の傳は、上は堯・舜より、周 [公]・孔 [子] に逮ぶ。我が皇上（康熙帝） 堯・舜の徳を備え、周 [公]・孔 [子] の道を明らかにし、躬から闕里に祀り、復た祭りを周公の廟庭に致さんことを命ず。禮儀 隆盛にして、詢（まこと）に萬世の章程爲り。應に該衙門をして即（ただち）に祭文を撰し、官を遣りて祭りを致さしめよ、と（『康熙起居注』康熙二十三年十一月十八日己卯条・一二五五頁～一二五六頁）。

そして康熙帝は次のように述べる。

祭を周公に致すは、禮は宜しく隆重なるべし。其れ恭親王長寧及び禮部尚書の介山をして偕に往かしめ、以て朕（康熙帝）の先聖を尊崇するの意を見せ（『康熙起居注』康熙二十三年十一月十八日己卯条・一二五六頁）。

このようにして康熙帝は曲阜において、儒家の伝統の尊重を宣言する。

これは、順治帝の時の高圧的な政策と異なるものであった。そもそも順治帝の時には、次のようなことがあった。

原任の陝西河西道の孔聞諱 奏言すらく「臣が家の宗子の衍聖公の孔允植

已に四氏の子孫を率いて、之を祖廟に告げ、俱に令に遵がいて雍髪し訖る。但だ念うに先聖 典禮の宗爲りて、顔・曾・孟の三大賢 並び起ちて之を羽翼す。其の定禮の大なる者は、衣冠より要なるは莫し。先聖の章甫縫掖（冠と衣装）①は、子孫 世世之を守る。是を以て漢より明に暨ぶまで、制度 各々損益（『論語』爲政）有りと雖も、獨り臣の家の服制、三千年來、未だ之れ改むること有らず。今、一旦變更すれば、皇上（順治帝） 崇儒重道の典に於いて、未だ備わらざる有るを恐る。應に蓄髪し以て先世の衣冠を復すべきや否やは、惟れ聖裁に統ぶ」と。[それに対して] 旨を得て「雍髪の嚴旨は、違える者は赦す無し、孔聞諱の疏もて蓄髪を求めるは、已に赦されざるの條を犯す、姑らくは聖の裔なるを念いて死を免れしむ。況んや孔子もて聖とするの時、此れ制に違うに似て、伊の祖の時中②の道に玷つくること有らんや。著して革職して永しえに叙用せざらしめよ」と（『世祖實錄』卷二十一・順治二年十月戊申（三十日）条* 蔣良騏『東華錄』卷五では八月に掛けている）。

①『禮記』儒行に「丘 ^{わか}少きとき魯に居り、縫掖の衣 ^きを衣る。長じて宋に居り、章甫の冠を冠す」。

②『中庸』第二章に「君子の中庸は、君子にして時中す……」。

清王朝による中国支配が始まったばかりの、順治二年（一六四五）、孔子の子孫の孔聞諱が、これまでの礼制を変更しないために雍髪令に対する特例を認めてほしいと提案するが、拒否されているのである。

このように、康熙帝は、南京で明・太祖の祭祀を行ない、明朝の正統な後継者であることを宣言する。また、曲阜においても祭祀を行ない、中国の伝統的価値観への理解者であるということを示す。そして、扈從した官僚も康熙帝の行為を賞賛する。こうして、いよいよ康熙帝は、満州人学者の従祀を提案させるのである。

(3)

顧炎武（明・萬曆四十年〔一六一二〕～清・康熙十九年〔一六八〇〕）は、從祀について次のように述べる。

周・程・張・朱の五子の從祀は、[南宋の] 理宗の淳祐元年（一二四一）に定まる。顏・曾・思・孟の四子の配享は、[南宋の] 度宗の咸淳三年（一二六七）に定まる。此れよりの後、國に異論無く、士に異習無し。元を歴て明に至り、先王の統 亡ぶも、先王の道 存す。[それは] 理宗の功 大なり（『日知録』卷十四・「從祀」条）。

周敦頤・程顥・程頤・張載・朱熹の五子の從祀と顏淵・曾子・思子・孟子の四子の配享の決定によって、政治的な連続性（統）がなくなっても、先王の道という伝統文化的な面では連続性を保つことができたというのである。

さらに、後の方東樹（乾隆三十七年〔一七七二〕～咸豐元年〔一八五一〕）も『漢學商兌』で、次のようにいう。

按ずるに孔庭の從祀は、人心學術の大防・垂教立制の眼目に繋り、萬世の瞻る所の法なり。一時・一人の私の意見を以てす可きに非ざるなり（『漢學商兌』卷上）。

漢民族が從祀というものを以上のように理解しているところへ、康熙帝はある提案を行なう。それは、孔子廟に満州人の学者を從祀してみようというものであった。

では、この從祀の提案はどのようなものであったのであろうか。

大學士の覺羅勒德洪・明珠・王熙・呉正治・宋德宜、學士の麻爾圖・呉興祖・牛鈕・王起元・禪布・徐乾學・韓爌・穆成格 折本を以て旨を請うに、九卿 會議して、大海（達海とも書く）榜式（榜式は「博士」の満州語の音訳で、文官にあたえた美称）を將^もつて孔子廟に從祀せん、と。上（康熙帝）

大學士等を顧みて問うて曰く「爾等は以て何如と爲す」と。王熙・呉正治 奏して曰く「孔廟の中は、必ず道統を承接し、理學を倡明にする者を得

て、^{はじ}方めて従祀す可し。此の事 之を詳審せざる可からず」と。宋德宜奏して曰く「孔廟に從祀するは、必ず人品・心術 端方にして廉潔なれば、^{はじ}方めて此の典を^う膺く。専ら^こ係れ文字を創造するが若きは、未だ從祀するに便ならず」と。上（康熙帝） 曰く「此の事は關係緊要なれば、爾等 詳察に具奏せよ」と（『康熙起居注』康熙二十四年十月二十四日辛亥条・一三八三頁～一三八四頁）。

恐らく康熙帝の意を受けた九卿（韓爌によると国子監祭酒の満州人官僚・鑲白旗人の阿禮（里）瑚（胡）の提案）から満洲正藍旗人で「満州聖人」（『養吉齋叢録』巻之一・一葉）とよばれる達海（？～一六三二年：達海の経歴等については、^{をしぶちはじめ}鴛淵一氏の『満州碑記考』一 達海巴克什・目黒書店：昭和十八年刊参照）を孔子廟に從祀したい旨の提案が出される（この疏そのものはいまのところ見いだせない）。達海は、漢文に精通するということでヌルハチと太宗とに仕えた人物である。学者としては、満州文字の改正を行っている。その改正した満州文字は以後制度化されている。

この提案に対して康熙帝は大学士達に質問する。すると、王熙・呉正治が道統を承け理学を明らかにしたものでなければ從祀できないとして慎重論をだす。そして、宋德宜は満州文字の「創造」（正しくは改正）だけでは、「從祀するに便ならず」と述べる。三人の漢人大学士の王熙・呉正治・宋德宜から、賛成意見を得られなかった康熙帝は、再議論を命ずる。

年月の記載がないので時期がはっきりしないが、この提案を聞いた内閣学士（康熙二十四年三月十五日～二十六年二月二十一日在任）の韓爌は、

臣（韓爌） 伏して詔旨を讀むに九卿詹事科道をして國子監祭酒の阿禮瑚の題せる「故大學士の達海宜しく文廟に從祀すべし」なる者を會議せしむと。臣（韓爌） 議の列に與かるに在らざるも……（『有懷堂文藁』巻十一・十五葉～十六葉）。

と言って、次のように反対意見を述べる。

……本朝の文教 ^{つい} 聿に興り、國書（國字・満州文字） 煥（かがやき）啓

し、萬世に垂示するは、達海 誠に助なしと爲さず。然れども書は六藝①に於いて特一なるのみ。如今の議は以て周・程・張・朱子の後を繼ぐとするが若きも、其の學は則ち點畫形象（歐陽脩・『歸田錄』卷一）なり。天人性命の發明有るに非ざるなり。若し諸々の經師の列を繼ぐを以てすとすも、其の功は則ち翻譯なり。訓故・箋疏・章句の「博文もて詳らかに説く」②の專・勤③有るに非ざるなり。二者の間 誠に以て比ぶを得ず。即ち其れ國家に于いて素より功有るも、〔從祀を執り行う〕学校の地は功臣 與からず。名臣〔であっても〕の論著する所無き者も亦た與らず。其の審慎なるや、素よりなり。臣（韓莢）嘗て之を聞く。「天子に非ざれば、禮を議せず、度を制せず、文を考えず」（『中庸』第二十八章）と。我が國家「文を同じくする」④の盛倬（おおきい）なるかな。太祖・太宗の天章（ぶんしょう）・寶思は、畫の義〔和〕に出で、爰の文〔王〕に繋ぐが如し。然り而して聖子神孫（神聖なる子孫）〔太祖・太宗の〕功德を推原するに、美は〔多すぎて〕書するに勝えず。亦た將に其の遠き者・大なる者を擧げんとするに、未だ此れに及ぶに暇あらざるなり。況んや〔太祖・太宗の時に活躍した〕達海 祇だ増定潤飭するの力なるをや。夫れ神謨（神謀）の指授を掩いて、獨り制作の隆名を享くれば、則ち君に逼るなり。一藝の宣勞（尽力）に邀いて遽に宮牆の美富を窺うは⑤、則ち師に逼るなり。一時の師（もろもろ）の虞りごともて⑥可と曰うと雖も、而るに千秋萬世の公議 未だ協わす。所有ゆる會議の准行（とりあ）ぐる前件は望むらくは停罷を賜うこと、或いは留中（留めておく）し、從容として詳酌して、遽に指揮（詔勅）あること勿らんことを。便ち謹みて議す（『有懷堂文藁』卷十一・十七葉～十八葉）。

①『周禮』地官・大司徒に「六藝は禮・樂・射・御・書・數」。

②『孟子』離婁下に「孟子 曰く、博く學びて詳らかに之を説くは、將に以て反って約を説かんとするなり、と」。

③『宋史』王巖叟傳に「聖賢の學は、造次もて成す可きに非ず。須く

積累に在るべし。積累の要は、専と勤とに在り。它の好を屏絶し、始めて之を専と謂う可し。久しくして倦まず、始めて之を勤と謂う可し」。

④『中庸』第二十八章に「今、天下 車は軌を同じくし、書は文を同じくし、行ないは倫を同じくす」。

⑤『論語』子張に「叔孫武叔 大夫に朝に語げて曰く、子貢は仲尼よりも賢ると子服景伯 以て子貢に告ぐ。子貢 曰く、之を宮牆に譬うれば賜の牆や肩に及ぶ、室家の好きを窺い見る。夫の牆は數仞、其の門を得て入らざれば、宗廟の美・百官の富を見ず……、と」。

⑥『禮記』緇衣に引く『尚書』君陳に「君陳に曰く、出入は爾の師（もろもろ）の虞るに由り、庶言と同じ、と」。

康熙帝は、孔子廟という漢民族の精神的砦に、自分と同じ満州族を従祀させることで、漢・満一体を考えたのであろうか。しかし、漢人の大学士達の思わぬ反発で保留にしてしまう。後に、この問題は、もう一度、達海を下位にあたる先儒の列に入れて従祀しようとする意見が出されることで蒸し返される。

大學士の覺羅勒德洪・明珠・王熙・呉正治・宋德宜、學士の麻爾圖・呉興祖・牛鈕・王起元・禪布・徐乾學・韓爌・穆成格 折本を以て旨を請う……
 又た九卿・詹事・科・道 會議して達海榜式^もを將って先儒の伏勝等の列に入れて、文廟に従祀せんとす、と。上（康熙帝） 大學士等を顧みて問うて曰く「此の事 爾等の意は若何」と。明珠等 奏して曰く「向に達海榜式^{さき}曾經効力あるに因りて、已に其の子孫に官秩を授け、以て皇恩を展ぶ。必ずしも文廟に入れざるに似たり」と。上（康熙帝）曰く「然り。必ずしも従祀せず」と（『康熙起居注』康熙二十四年十一月初八日甲子条・一三八九頁）。

これは、具体的には宋の六子（周敦頤・張載・程顥・程頤・邵雍・朱熹）より下位にして従祀してみたいという訂正意見と考えられる。ところが、これも反発をうけてしまう。そして、満人大学士の明珠が、おそらく漢人官僚の意見をま

とめて、その必要がないと述べる。康熙帝も、これを承認して従祀はあきらめる。

こうしたことから、康熙帝は、漢人たちの伝統文化に対して、後援者としてなら大いに歓迎されるが、自分たち異民族がその中に入ろうとすると、たいへんな反発を受けることを知る。

また、拙稿「青年康熙帝の学力と官僚」（『経済理論』第308号）において検討したように、堯・舜のような聖人皇帝になれると漢人官僚から言われ続けてきた康熙帝にとっても、自分と同じ満州人の学者が排除されるのならば、漢民族の伝統文化の象徴である堯・舜などに康熙帝が本当になりうると、漢人が考えているのか分からなくなってしまったのではないか。孔子廟であれほどの賛辞を受けたのかかわらずである。つまり、漢民族の伝統文化に対しては、異民族の侵入を頑なに拒もうとする漢人たちの本音を見た気持ちになったと考えることはできないだろうか。

さて、この従祀についての議論は、康熙二十四年の十月から十一月にかけてのことである。拙稿「『明史』道学伝不成立をめぐる諸問題」（『中国研究集刊』秋号〔第二十二号〕・大阪大学文学部中国哲学研究室・一九九八年）で考察したように、この年の十一月から翌康熙二十五年の三月までの間に、『明史』道学伝の不成立も決定する。そもそも、『明史』道学伝というものは、康熙帝が漢民族の精神的な伝統文化の象徴である道統を受け継いでいるということを示すために、かなりの批判にもかかわらず、設けるように準備されてきたものであった。しかし、この時期に急に取り下げになったのは、満州人学者の従祀の否定と関連するのではないだろうか。

それはどうしてなぜか。次の（4）で検討するように、このすぐ後に起こった儒者の従祀の位置についての議論に対する、康熙帝の態度から理解できるのではないかと私は思う。

（4）

満州人学者の従祀があっさりと否定されるという流れの中で、相変わらず康

熙帝と漢民族の伝統文化の象徴である道統とを結び付けて、持ち上げる官僚もいた。許三禮である。許三禮は、『孟子』盡心下にある五百年ごとに聖人が出現するということをふまえて、董仲舒を先儒からより上位の先賢へ改称するように提案する。朱子から五百年を経た現在、こうすることで、康熙帝は五百年後の聖人となる道が開けるといっているのである。

……伏して見るに我が皇上（康熙帝） 道を重んじ朱賢（朱熹）を崇び魯に幸し孔聖（孔子）に禮すること往代に異なるは、原より偶然に非ず。五百の昌期の今の時に在ればなり①。……今、請うらくは禮部に勅下して特に漢儒の董仲舒を將って宋儒の周敦頤・張載・程顥・程頤・邵雍・朱熹もて進めて先賢と稱するの例②に引照し、聖門六十三賢の下なる者へ序次せんことを。[このようなことを請うのは] 特に董〔仲舒〕の賢 此の廡位を超えんと爲すに非ざるなり。適たま今日、皇上（康熙帝） 道原を倡明するを表し、天の盛舉よりして以て大道の源流を正せばなり。關する所 豈に淺鮮（ちっぱけなこと）ならんや。按ずるに漢儒の董仲舒 上は孔聖の傳に接するも五百年に及ばず。今は則ち朱熹を距てること已に五百歳有餘なり。臣（許三禮）の謂う所の「天心を表わして景運（好時運）に應ずる」なり。管見を揣^{はか}らず瀆請（なれなれしくいう）し、伏して祈る、睿裁もて部に勅し施行されんことを③（「題漢儒董仲舒進稱先賢疏」『懷仁堂遺稿徵存』卷一・一葉～二葉）。

- ①『孟子』盡心下に「孟子 曰く、堯・舜より湯に至るまで、五百有餘歳。禹・皋陶の若きは、則ち見て之を知り、湯の若きは、則ち聞きて之を知る。湯より文王に至るまで、五百有餘歳。伊尹・萊朱の若きは、則ち見て之を知り、文王の若きは、則ち聞きて之を知る。文王より孔子に至るまで五百有餘歳。太公望・散宜生の若きは、則ち見て之を知り、孔子の若きは、則ち聞きて之を知る」とあり、朱子は趙岐の注を「五百歳にして聖人出づるは、天道の常なり。然れども亦た遲速有り、正に五百年なる能わず、故に有餘と言う」として『孟子集

注』に引用する。

②周敦頤・張載・程顥・程頤・邵雍が、明・崇禎十五年（一六四二年）に先賢から先儒に改められたことを指す。

③「題漢儒董仲舒進稱先賢疏」の末尾には「康熙二十四年十一月二十八日に題し、十二月初六日に奉^うけたる旨もて、九卿・翰林・詹事・科・道 會議し具奏さる」とある。

この提案がなされたのは、満州人学者の従祀が否定された直後、つまり、満州人は、漢民族の伝統文化の象徴である道統と関わらせたくないという意見が採択されたすぐ後である。そうした時期に満州人皇帝と道統との関連づけた疏を提出した許三禮は、康熙帝に記憶される存在となる。後、康熙二十八年に起こった徐乾學たちの南人党攻撃の先陣をきったのは、許三禮である。李光地の証言によるとそれは康熙帝の示唆によるものだとする（拙稿「李光地と徐乾学」（8）・『經濟理論』第298号参照）。

康熙帝はこれをうけて、康熙二十四年十二月三日に議論を命じる。

大學士の覺羅勒德洪・明珠・王熙・吳正治・宋德宜、學士の麻爾圖・吳興祖・牛鈕・王起元・徐乾學・韓焱 折本を以て旨を請うに、御史の許三禮 先儒の董仲舒は應に六十三賢の列に在るべしと條奏す、と。上（康熙帝）曰く「爾等の意は若何」と。明珠 奏して曰く「臣等 曾て漢〔人の〕大學士に問うに、據りて云う『漢儒は向に揚雄を先儒に列すること有り。〔明の太祖の〕洪武の時（『明會典』によれば、洪武二十九年〔一三九六〕のこととする）に至りて始めて揚雄を黜けて易えるに董仲舒を以てす』と。今、御史の許三禮の條奏に據れば、董仲舒を以て改めて先賢に入れんと欲す。應に九卿・翰林・詹事・科・道をして會同し可否を確義せしむべし」と。上（康熙帝） 又た漢〔人の〕の大學士に「爾等は何をか云う」と問う。王熙 奏して曰く「董仲舒 久しく先儒の列に在り、今改めて先賢に入れんと欲す。其の是否は應に九卿・翰林・詹事・科・道をして會同し詳義せしむべし」と。上（康熙帝） 之に従う（『康熙起居注』康熙二十四年十二

月初三日己丑条・一四〇七頁)。

『康熙起居注』・『聖祖實録』を見るかぎりでは、許三禮の提案そのものに対しての討論の結果報告は載せられていない。しかし、この後も董仲舒は先賢の列に改められていないので、この提案は認められなかったようである。

ただ、こうした提議は続けてなされている。時期がはっきりしないが、この少し後に李振裕が従祀の順序を各人の年代に従ってするように提案した（「請釐正學宮従祀位次疏」・『白石山房集』巻第二十・十葉～十二葉所収、また『白石山房稟』巻十四・四葉～六葉所収）。さらに、許三禮も「周惇頤・程顥・程頤・邵雍・張載・朱熹は應に先儒の上にして左丘明の下に在るべし」（『康熙起居注』康熙二十五年七月二十六日戊辰条・一五二三頁）という提案を行なう（この疏そのものは、今のところは見いだせない）。

その結果、康熙二十五年七月二十六日に康熙帝は、意見を聞くことにする。

九卿の沙澄等 奏して曰く「臣等 會議し得たり。江南學院の李振裕・臺臣の許三禮が條奏する先賢・先儒の従祀の位次の兩疏、[つまりそれは] [許三禮の] 前議は『周惇（敦）頤・程顥・程頤・邵雍・張載・朱熹は應に先儒の上にして左丘明の下に在るべし』と、[李振裕の] 後議は『應に世代の序に照らして位次を定むべし』とあるを」と（『康熙起居注』康熙二十五年七月二十六日戊辰条・一五二三頁＊『憺園文集』巻三十五「紀事」とはわずかな異同がある）。

康熙帝は、まず許三禮の提案についてたずねる。

上（康熙帝） 曰く（『憺園文集』は「奉旨」に作る）「爾等 前議には諸臣 何らかの意見有らん」と。達哈塔・伊桑阿 奏して曰く「臣等 原とより意見無し、但だ六子（周敦頤・程顥・程頤・邵雍・張載・朱熹） 既に先賢と稱さるれば、宜しく七十二賢の列に在るべし」と（同上）。

達哈塔と伊桑阿とが、別に意見はないが、先儒の左丘明の下ではなく先賢の列に配置すべきだと答える。

続けて、康熙帝は李振裕の提案について質問する。

上（康熙帝） 曰く「爾等 後議には諸臣 何らかの意見有らん」と。余國柱 奏して曰く「師生の誼は古來 最も重し。即ち李侗の如きは乃ち朱熹の授業の師なり。今、弟子を以て反って其の上に居り、師 長なるも反って其の下に居るは、先賢の靈 亦た安からざる者有り」と。陳廷敬 奏して曰く「六子（周敦頤・程顥・程頤・邵雍・張載・朱熹） 六經を羽翼し、功 泯ぼす可からず。但だ坐位は仍お世次に照らすを便と爲す」と。徐乾學 奏して曰く「六經を羽翼するは、漢儒も亦た功有りと爲す、若し漢儒の箋註無ければ、六經 已に泯没すること久し。六子 其れ何に従りて考究せんや。況んや許三禮 先に曾て『董仲舒 宜しく先賢と稱し、六子の上に居るべし』と條奏す。今、又た『六子 宜しく先賢の列に在りて、[董]仲舒の上に居るべし』と云うは、前後頗る互いに異なるを覺ゆ」と。李之芳 奏して曰く「先賢・先儒 原より同じからざる有り。但だ位次 各々其の代に従へば、未だ不可と爲さず」と。梁清標 奏して曰く「先賢・先儒の位次は今に及べば宜しく一定の序有るべし、然らざれば恐らくは後來 攙越する者更に多からん」と。沙澄 又た奏して曰く「從祀の位次は、但だ其の道德品行の優劣を論じて以て坐次の上下を爲す。即ち孟軻の如きは七十二賢の後に生まるるも、位は十哲の上に在り。曾參は子なるも、位は[父親の] 曾點の前に在り。豈に復た前後世代を論ぜんや」と。九卿 出づ（同上）。

陳廷敬・徐乾學・李之芳・梁清標は賛成し、沙澄と余國柱とが反対する。特に沙澄の反対意見は、道德品行の優劣でもって順位を決めるべきだとする。

九卿が退出した後、康熙帝は大學士達に九卿の意見はどうかとたずねる。

上（康熙帝） 又た大學士等を顧みて曰く「爾等 九卿の議を以て如何と爲す」と。明珠 奏して曰く「臣等 衆もて見るに、後議を以て然りと爲す」と。宋德宜 奏して曰く「後議は固より是なり。但だ孟軻の位は七十二賢の上に在れば、世次 論ぜざる所有り。前議 亦た未だ不可と爲さず」と。上（康熙帝） 曰く「理として二つの是無し。前議 是なれば、則ち

後議 必ず非なり。前議 非なれば、則ち後議 必ず是なり」と。上（康熙帝） 又た李光地を顧みて曰く「爾の意は何をか云う」と。李光地 奏して曰く「後議 頗る隱當なるを覺ゆ。若し六子の功德を論ずれば、宜しく四配（顔淵・曾子・孟子・子思）の下に在るべし。前議 之を七十二賢の列に處くは、則ち上下皆な其の所を得ず」と（同上・一五二三頁～一五二四頁）。

明珠は、賛成の多かった李振裕の提案がよいと述べる。すると、宋德宜は、許三禮の提案も不可ではないとする。康熙帝は、これを聞いて、どちらかが是でなければならぬと言ひ、李光地に意見を述べさせる。李光地は、康熙帝の意向が分からなかったために、李振裕の提案に賛成しながらも許三禮の提案もよいという含みを持たせる。

康熙帝は、このような回答を聞いて、次のように述べる。

上（康熙帝） 曰く「此の事 國計（けいざい）・民生（せいかつ）に關する無し、許三禮の輩 虚名を沽らんと欲するに過ぎざるのみ。朕（康熙帝） 九卿の會議するの時、彼此の争論 紛紛として絶えずと聞く。若し他の事 盡く然らば、豈に益有らざらん」と。明珠 奏して曰く「聖見 誠に然り」と（同上・一五二四頁）。

康熙帝は、こうした提案はまったく役に立たないものであるとする。儀礼に関する議論だけでは、現実の政治に役立たないとするのである。

そして、翌々日に康熙帝はもういちど、この問題について質問した後で、自分の意見を述べる。

上（康熙帝） 又た江南學院の李振裕・御史の許三禮の先賢・先儒の従祀の位次を條奏するに言及し、大學士の明珠等を顧みて曰く「九卿〔の李振裕・許三禮に対する〕兩議〔について〕、爾等の意は若何」と。明珠 奏して曰く「滿〔州人〕 大臣の意は、師弟を以て次序を分かつは然らずと爲す」と。上（康熙帝） 曰く「先賢・先儒の位次を定むるは、止だ應に其の道徳・行誼を視て以て次序を爲すべし。師・弟に據りて定例と爲す可からず。

即ち明末の時の如きは、師生・同年の起見（着想）従り、私を懷き怨み（『憺園文集』は「復」に作る）に報じ、互いに相い標榜し、全く公を爲すの念無し。理に非ざるの事を冤抑（無理強い）すと雖も、毎に師生・同年の情面に因り、遂に掣肘を致し、未だ直に公を乗りて立論行事するに従う者有らず。故を以て明季の諸事、皆な廢弛を致す。此の風 殊に惡む可しと爲す。今 亦た之を絶無と謂うを得ず」と。王熙 奏して曰く「順治の初年 尚お此の風有り。今、皇上（康熙帝） 聖明なれば、此の風 已に久しく息む」と。上（康熙帝） 曰く「若し漢官の内に全く師生 相い^{かく}暱すの事無ければ、亦た必ずする可からず」と（『康熙起居注』康熙二十五年七月二十八日庚戌条・一五二五頁＊『憺園文集』卷三十五「紀事」も一字を除いて同文）。

満州人大学士たちは、師弟という年代順で位置を決めるのはよくないと述べる。そして、康熙帝は、それをうけて、道徳的な価値判断で順位を定めるよう述べる。師弟の分を重んじると、明末の官僚達のように腐敗してしまうとする。康熙帝は、従祀の順位だけを問題にしているのではない。それを官僚の腐敗に結びつけて考えた。ここには、積極的に従祀の序列に関わろうとする態度はない。

このように、康熙帝は康熙二十五年の段階になると、漢人官僚たちの提議する儒教的な議論には、直接的にはかかわらず、その議論から政治的な方針を導き出そうとする。道学と治世とを同じものではなく、別のものとしてとらえるようになってきた。つまり、朱子学的な治世の方法にしたがって康熙帝自身が堯・舜のような聖人皇帝となり、まわりの官僚を感化して、すぐれた政治を行なおうという理想的な考えを、現実的なものへと変更しはじめたと考えることはできないだろうか。

おわりに

以上、見てきたように康熙帝は、康熙二十四年に満州人学者の従祀が拒否された頃から、朱子学的な、いわば理想的な治世の方法ではなく、現実的なものへと

変更しはじめたといえるのではないだろうか。それが、決定的となったのは、次に述べる道学者官僚として期待した湯斌への中傷であった（拙稿「李光地の眼を通して見た湯斌の失脚」（上）・（下）〔『経済理論』第273号・第274号〕参照）のではないか。

そもそも湯斌は、満州人学者従祀の拒否や『明史』道学伝の不成立の決定などが一段落した時に、江寧巡撫の任期途中に礼部尚書掌管詹事府として宮廷に呼び戻される。戻ってくると、康熙帝は、次のように言う。

汝（湯斌） 江蘇に在りて能く己れを潔くし屬を率い、實心もて事に任ず。

天下の官 才有る者少なからざるも、操守謹慎なる者は未だ多く見る能わ

ず。汝（湯斌） 前に陞辭するの時、自ら平日 敢えて自ら欺かずと言う。

今、克く此の言を踐む。朕（康熙帝） 用て嘉悦す。故に超擢を行なう。

爾（湯斌） 其れ之を勉めよ（『康熙起居注』康熙二十五年閏四月二十一日甲戌条・一四七九頁）。

康熙帝は、道学官僚としての湯斌に宮廷での道学者らしい活躍を期待していたようである。ところが、拙稿「李光地の眼を通して見た湯斌の失脚」（上）・（下）で検討したように官僚たちから中傷を受けてしまう。そして、康熙帝の気持ちも醒めてしまい、翌年の康熙二十六年八月一日に失脚する。

拙稿「李光地の眼を通して見た湯斌の失脚」（上）・（下）で検討した李光地の証言の日付が正しいとしたならば、海関問題で湯斌の仮道学者ぶりに対して、激怒した康熙帝は、翌月の康熙二十五年七月二十八日に従祀の位置についての議論に決着をつけているのである。この段階で康熙帝は儒家的な方法で、官僚たちを動かすのはできないと悟ったのであろうか。つまり、この時期、康熙帝は、王道による統治から霸道による統治へと政策転換を行なうようになったのではないか、と私は考える。